

生成AI時代にこそ「創造的思考力」を—— 『ライフロング・キンダーガーテン』再読のすすめ

ミッチェル・レズニック著『ライフロング・キンダーガーテン 創造的思考力を育む4つの原則』（日経BP、2018年）を紹介したい。著者はマサチューセッツ工科大学メディアラボの教授であり、子ども向けプログラミング言語「Scratch（スクラッチ）」の開発を主導した人物として知られる。本書は、2020年度からの小学校におけるプログラミング教育の必修化を前に、「プログラミング的思考」とは何か、プログラミングを通じて子どもたちに何を育みたいのかを考える手がかりとして、教育関係者の間で広く注目された一冊である。

書名の「ライフロング・キンダーガーテン（生涯幼稚園）」には、幼稚園児がブロック遊びや粘土遊びの中で試行錯誤しながら学ぶ姿こそ、生涯にわたる学びの理想形であるという著者の思想が込められている。その学びを支える原則として示されるのが「4つのP」である。すなわち、意味のある作品づくりに取り組む「プロジェクト（Projects）」、自分が本当に好きなことに取り組む「情熱（Passion）」、仲間と作品を共有し協働する「仲間（Peers）」、そして遊び心をもって実験や挑戦を繰り返す「遊び（Play）」の4つである。子どもたちは、情熱を注げるプロジェクトに、仲間とともに、遊び心をもって取り組むとき、創造的な学び手として最も成長するというのが本書の中心的な主張である。

本書が刊行されてから年月が経ち、いま教育現場には生成AIの利用が急速に浸透しつつある。文章や画像、さらにはプログラムまでもがAIによって「生成」できる時代に、人が学ぶ意味はどこにあるのか。私は、その答えの一つが本書の説く「創造的思考力

をはぐくむ」ことにあると考えている。AIが出力するものを受け取るだけの消費者にとどまるのか、AIを道具として使いこなしながら自らのアイデアを形にする創造者となるのか。両者を分けるのは、何をつくりたいのかという情熱であり、試行錯誤を楽しむ遊び心であり、仲間との対話を通じて構想を磨いていく力であろう。生成AIの時代だからこそ、「4つのP」に支えられた創造的な学びの価値を、あらためて見つめ直したい。

高等学校の教科「情報」に目を向けると、2022年度から共通必修科目「情報Ⅰ」が始まり、すべての高校生がプログラミングやデータの活用を学ぶこととなった。さらに2025年1月実施の大学入学共通テストから「情報Ⅰ」が出題科目に加わり、教科の位置づけは大きく変化している。この背景には、小学校でのプログラミング教育、中学校技術・家庭科（技術分野）でのプログラミング学習の充実があり、小・中・高等学校を通じて情報活用能力を体系的に育成するという教育課程上の設計がある。高校の情報科は、この積み重ねの上に立つ教科なのである。

だからこそ、情報科の教員を目指す学生には、知識や技能の指導にとどまらず、児童生徒がそれまでに培ってきた学びを受け止め、「4つのP」のような視点から創造的な学びをデザインできる教師になってほしい。本書はそのための豊かな示唆を与えてくれるはずである。

人間健康学部 健康情報学科
上級准教授 太田 佐栄子

～教育・養護実習生の声～



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年次

前沢 巴菜 (まえざわ はな)

教育実習校：西之表市立種子島中学校（保健体育）

私は、3週間の教育実習を通して、多くの学びと気づきを得ることができました。保健体育だけでなく他教科の授業も見学し、教科ごとの指導方法や生徒との関わり方には多くの工夫があることを学びました。また、実際に授業を担当したことで、生徒に「わかった」「できた」と感じてもらえる授業をつくることの難しさを実感しました。特に、

説明や指示は具体的かつ簡潔に伝えることや、生徒が安心して発言や活動に取り組める雰囲気づくりの大切さを学びました。一方で、生徒たちが仲間と協力しながら意欲的に活動する姿や、先生方が互いに連携し、学校全体で生徒を支えている姿から、教師という仕事のやりがいと責任の大きさを改めて感じました。中学生時代を過ごした母校で、教師という夢に向かう貴重な経験ができたことに心から感謝しています。今回の実習で得た学びを今後に生かし、生徒一人ひとりに寄り添い、その成長を支えられる教師を目指して努力していきたいです。

～ボランティア活動に参加した学生の声～



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年次

久高 麻萌 (くたか まほろ)

ボランティア実施校：今帰仁村立兼次小学校、今帰仁村立天底小学校、今帰仁村立今帰仁小学校（養護）

私は養護教諭志望ですが、水泳競技部マネージャーとして培った水泳の知識を活かしたいと考え、今帰仁村内小学校を中心に水泳指導ボランティアを行いました。

特に活動中に意識したことは、児童生徒に「水や水泳、泳ぐことは楽しい」と感じてもらうことです。水泳は技能差が見えやすく、水泳が苦手な児童生徒にとって心理的な負担になりやすいと考えています。そのため、「泳げないか

ら何もしない」という状況を作らないよう、指導教員と協力し、お手本を示しながら一人ひとりに合わせた目標設定を意識しました。また、できたことを積極的に褒め、成功体験に繋げることで、「できた」「もっとやってみたい」という意欲を引き出すよう努めました。その結果、限られた指導時間の中でも、多くの児童生徒の笑顔を見ることができ、水泳の楽しさを伝えることの大切さを実感しました。

さらに活動を通して、児童生徒の命を守るために周囲に目を配り、安全管理を行う重要性を学び、多角的な観察力を磨くことができました。この経験を今後の養護教諭としての糧にしたいと思います。

人間健康学部 スポーツ健康学科 3年次

城間 咲穂 (しろま さきほ)

ボランティア実施校：今帰仁村立兼次小学校（養護）

兼次小学校での授業補助や放課後の学習支援を通して、児童との関わり方や、学習意欲を引き出すための声かけ・支援について学ぶことができました。多学年の授業に参加させていただいたことで、発達段階に応じた教育や関わり方の違いを実感できたことは貴重な経験となりました。例えば1年生の授業では集中力を保つための様々な工夫が取

り入れられ、5年生ではルールを決めた上で児童が自ら考え行動する場面が見られました。

さらに養護教諭の職務を見学した際には、けがや体調不良で保健室を訪れる児童を丁寧に観察し、「晴れていて気持ちいいね」といった日常会話を通して安心感を与える姿がとても印象的でした。

一人ひとりの発達段階や特性、状況に合わせて関わることの大切さを知り、教職員には知識や技術だけでなく、児童の小さな変化や気持ちを丁寧に捉える姿勢が不可欠であると実感しました。この経験を今後の大学での学びや実習に活かし、将来、子どもたちが安心して学び、成長できる環境をつくることのできる養護教諭を目指します。

人間健康学部 スポーツ健康学科 2年次

前徳 晴輝 (まえとく はるき)

ボランティア実施校：今帰仁村立兼次小学校、今帰仁村立天底小学校、今帰仁村立今帰仁小学校（体育）

学校でのボランティア活動を通して、指導の方法は生徒一人ひとりの性格や理解度によって異なり、同じように教えるだけではうまくいかないことを実感しました。生徒に合わせて声のかけ方や教え方を考えることは難しかったですが、実際に関わる中で生徒が理解してくれたり、できるようになったときには、とても嬉しく、やりがいを

感じました。また、生徒との関わりを通して、相手の立場に立つて考えることやコミュニケーションの大切さなど、自分自身も多くのことを学ぶことができました。

教員を目指している人にとっては、実際の学校現場で生徒と関わることで、将来を考えるうえでとても良い経験になると思います。教員を目指していない人にとっても、社会貢献の一環として活動できるだけでなく、人との関わり方や責任感など、さまざまな力を身につける機会になると思います。難しいこともありますが、それ以上に楽しく、得られるものが多い活動なので、ぜひ多くの人に参加してほしいです。